

「待つ」

朗読箇所 マルコ福音書13章28-37節

- 1、待降節・アドヴェントです。クリスマスまでの四週、信仰の覚醒を喚起する暦の季節です。紀元13世紀ごろに始まりました。(Advento)はラテン語で「迫り来る」「近付きつつある」という意味。名詞では「到来」「接近」を意味します。イエスの来臨(来ること)への心の備えをする期間としてま守られています。待降節の「聖書朗読日課」はいろいろ工夫をされて来ました。
- 2、マルコ13章が待降節に読まれるのは「いちじくの木 of 例え話」があるからです。いちじく of 枝が柔らかになり葉が出るようになると夏の収穫が近いことを悟ります。イエスは季節の変化に、神の国、神の支配の到来を読み取ったのです。「いちじくの木から教えを学びなさい」とあります。「学ぶ」は、29節では、「悟りなさい」と言い換えられています。いちじく of 収穫の嬉しさの経験から神がもたらす収穫、恵みを悟れ、ということです。相当の感性が要求されなす。
- 3、マルコ13章には初代の教会 of 大きな問題が書かれています。世 of 終わりが近いと大騒ぎをしていたことです。地震が起るとか、飢饉が起るとか、戦争が始まることなどです。12節には「兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。」などと書かれています。マルコは、そういう流言飛語に紛らわされないうで、しっかり自分というもの持っていなさいと主張します。当時「黙示文学」表現 of し方があって、いろいろな徴 of 出来事に「世 of 終り」を読み込むことは流行だったのです。13章 of のうち、5、9、23、33、35、37、節は、マルコ of の編集句です。ここには「気をつけて」「目を覚せ」 of の句が繰り返して出てきます。マルコ of の主張です。マルコ of の示す生き方は、未来 of の事件 of の予告に引きずられないうで、現在をしっかりと生きよ、ということです。「主が来られることに目を覚ましてい」ということです。今 of の出来事を真剣に生きて、一つ一つ決断を重ねて、後は「近い」と言われる「主」にゆだねて生きるのだ、ということです。
- 4、浜田寿美男『ありのままを生きる』(岩波書店1997)。30年前、自閉症 of の子どもに会い、人生 of の考え方を変えます。自閉児 of の振る舞いが「へん」、私たちが「当たり前」と考えなうくなります。治療とか訓練 of の危うさを知ります。彼ら of の振る舞い of の不思議さも、障害を持たない子 of の振る舞いも、「文化」です。彼はUさんという親に会い「自閉症が直ってもらったら困る」という言葉を聞きます。始め分からなかつた。不可逆的に背負った条件 of のもとで、より生きやすい形を求めるとは当然ですが、それはおよそ「治る」という発想とは別 of のものである。Uさんがいっているのは、この子はこの子でよい。一人 of の人間でそれだけでよい。その子をありのままに引き受け一緒に生きてゆく、この子 of の生きる形を逆説的に、しかもある意味では非常に素直に表明したものであると考えます。治るのを待つ of ののではないのです。今を決断して、その子 of のあるがままを待つ of のです。「主を待つ」ことは「坐して待つ」という待ち方はなくて、「今 of の決断を重ねる」ということで「その後は、来られる主にゆだね」ということです。